九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

縁は妙なるもの ： 労務三傑余誌

左合, 藤三郎
元『日本労務管理年誌』編纂委員

https://doi.org/10.15017/13667

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 9, pp.113-116, 1977-12-04. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

縁は妙なるもの

――労務三傑余誌――

左合藤三郎

一、労務草創期の三傑

〝縁は異なもの〟、妙なるものとは誰しもが一、二度は感ぜられたことがあらう。労務三傑の間にも縁の有無、機妙を深く覚えしめられることがあった。

大正六年から八年にかけて、Aは過労に倒れた身心を癒やすため六年の初めから八年五月頃まで別府、津屋崎に転地療養し、Bは六年春に古賀山炭坑に出向し、八年十月まで鉱夫取締係主任として労務人生の第一歩を踏み出してゐた。Cは六年の春に永年勤務した三池から本店に転任したが、事業所に事ある毎に要務を帯びて九州へ出張してゐた。労務三傑が九州に集ってゐたのはこの期間だけであった。

この期間はまさにわが国近代企業労務の草創期であり、代表企業に労務機関が設けられ始める労務分科の陣痛期に当る。このときAとBは出会ふことなくそれぞれの持場に帰っていったが、時に九州へ出張して来るCとはBは行きずりながらも上京の車中に同乗し、後に親交を深める最初の出会ひをもつた。その上に、労務三傑各人の労務人生にとっても重要な機縁が訪れてゐる。それがともに大正七年であるのが妙である。

労務三傑――といっても、どなたも耳にせられたことはあるまい。縁下の愚がひそかに奉った称なのだから、それは当然である。わが国近代の代表企業において労務の基礎を形成確立し、さらにそれを発展させた労務担当者の中で多少とも親接し、また関係資料を一読することのできた方々に限って、労務精神、業績、人物等を総じてすぐれた労務人を挙げるならば、鷲尾勘解治（住友別子鉱業所初代労働課長）、平沢幹（三菱鉱業初代労務部長）、長沢一夫（三井鉱山初代調査部長）の御三方である。××三傑に模して労務三傑と讃称してゐるのである。

二、長沢、平沢両者の出会ひ

大正十年に石炭鉱業聯合会、鉱山懇話会の共同研究会がはじめられてゐる。両団体の大手企業労務担当者が集って労務問題を研究協議する会である。その第一回のとき、

（オヤ・・・・　彼はどこかで見た顔だ。）

お互ひにさう思った。会議がはじまると、自己紹介によって三井鉱山の長沢、三菱鉱業の平沢だと知った。そのうちに想ひ出した。

（あいつは、九州から上京する列車の中で向ひの席にゐた男だ。）

大正七年の米騒動のときである。例によって八月に富山県に勃発した米騒動は、このときは燎原の火のやうに急激に全国に波及した。九州地方の炭坑には八月中旬から約一ヶ月間鉱夫暴動の濫発となって荒れ狂ったことは先刻周知のところである。

この渦中において、九月初めに勃発した三池万田坑騒擾の実情調査、対処のため三池に出張した長沢さんが帰京する列車の中のことである。当面の急務を終えた安堵もあった。また労務開眼による気の昂揚もあった。同行の附属病院長と酒を酌みながらの談論がはずんだ。その向

ひの席に乗り合せた青年が眉をしかめて、いかにも腹立たしげに時々こちらに眼を向けるのは分ってゐたが、酒と談論の熱にまぎれて無視してゐた。

平沢さんは、唐津炭田における鉱夫騒擾の一過を見て、その実況報告のため上京した。向いの席の二人が酒を飲みながら四辺構わず談笑している。痩身で精悍な面貌の男の方が盛んに息まいてゐた。傍若無人な奴だ！と顔をしかめても、お構ひなしだ。この野郎！……と腹が煮え沸ってくるのをやっと抑えてゐた。

だから、言葉を交えるどころでなく、寧ろ良くない印象のままに別れた。

会議が終った後で双方からその想ひ出が語られた。あのときは……といふことで、その後三井、三菱両者の労務担当者としての交わり以上に親交を深める機縁となった。

これは長沢、平沢御両人からそれぞれうかがった想ひ出である。御両人にとっても、偶縁として印象が深く刻みこまれてゐたに違ひない。

三、長沢さんの労務開眼

長沢さんは、兄が学友であった縁から牧田環さんに認められ、明治四十一年に三井鉱山に入社した。三池炭坑勤務といふ条件であった。三池で最初にやらされたのは、重罪囚が入坑している宮原坑囚人部内の監量であった。大学出のホヤホヤとしては戦々兢々であったといふ。翌年春には三池築港の船積仕事に廻され、三年ほど経て計算主任（会計係）勤務となった。これが三井鉱山における大学卒新入社員実習制の嚆矢となった。次いで庶務主任（庶務係）に廻り、大正六年の春終り頃に本店第二秘書（後の庶務課長）に転任した。

万田坑騒擾の実情と原因を究明するため関係者に種々訊ねても、誰もなかなか真実を語ってくれなかった。十年近く三池に在勤してゐたし、親しい者もゐたのだが……。しかし、暴動坑夫の処分に当って、鉱夫主任（鉱夫係）の主任や深川正夫は、涙を流して哀訴するに当った。

坑夫は実際に使ってみると、まことに可愛い者ばかりだ。真卒だ。ところが、坑夫に対する取扱ひ方は乱暴で、見るに忍びないものがある。自分としてはとても処断することは出来ない。

と。鉱夫等の間に不満が多かった医院の病人に対する取扱ひ方についても、院長等がやうやく心底を訴へたのは、鉱夫長屋や医員数などからして現状が精一杯であって、鉱夫等の要望に応へるには、鉱夫長屋の改善、医員の増員、病院設備の増強が必緊である　といふことだった。鉱夫長屋の隅々まで見て廻ってその尤もなことを確かめ、鉱夫生活の惨めさ、鉱夫管理の不備、係員の鉱夫等に対する態度の不良などを知った。これが長沢さんの労務開眼であった。これより三井鉱山労務の基礎形成に尽してゆくのである。

四、平沢労務の出発

平沢さんは、知友の島村秀夫さんが木村久寿弥太の甥である縁から大正五年の暮に三菱合資に入社し、木村さんが部長をしてゐる炭坑部所属となった。翌六年春には、設立されたばかりの東多久炭坑会社の古賀山炭坑に出向した。労務専任者のテストケースとするといふ岩崎小弥太社長、木村専務理事の意向によるところであった。このテストは成功した。三菱は七年から大学新卒者を公募して大量採用しはじめる。この年三菱鉱業のみでも労務係員を約十人採用してゐる。

東大在学中に先輩の蒔田さんから頼まれて鉱山部救済規則の原案を起草したといふから、平沢さんはやはり三菱に縁があったのであらう。

古賀山炭坑では、下宿や鉱夫長屋で納屋頭や鉱夫たちと談笑しながら啓蒙につとめた。六年夏の出水の際、水源池が崩壊の危機に至った

が、三日三晩徹夜して一同を指揮して崩壊から救った。鉱夫等の信望を集めた。七年の米騒動の際は丁度学卒新入者の九州地方場所見学の引卒者として筑豊を一巡したところであった。古賀山周辺炭坑の情勢緊迫の報により急拠帰坑したが、すでに納屋頭を先頭に鉱夫等はみずから他坑からの侵入を防衛する態勢をとってゐて、つひに事無きを得た。当時暴動は勿論、紛議もなく平静を保った稀少例である。周辺炭坑の騒擾情況を本店へ報告に行ったのはこの直後である。

従業員団体の嚆矢とされる明治鉱業信和会に先立って古賀山炭坑青年修養会の名称で従業員団体を設けてゐる。近代日本労務に大きな影響を与えた第一回国際労働総会が大正八年十月に開催されたが、労務問題に深い関心を抱いてゐる岩崎小弥太社長の命により三菱長崎造船所職工課長の長岡徳治さんとともに総会見学を兼ねて欧米労働事情視察に出張し、翌九年五月頃帰国して直ちに新設の本店労務係主任となった。以後本店労務担当者として終始し、三菱鉱業労務の基礎形成・確立に尽瘁した。退職金給与に関する規則を起草したときには、一字の誤りが従業員の給与に影響するところから、斉戒沐浴して一字々々精魂を傾けて浄書したといふことである。

五、鷲尾労務の接覧

労務史料編纂に携っていた当時、別子鉱山の労務史料の調査採集に行くとき、平沢さんから、

別子には鷲尾さんといふすぐれた先覚がをられる。初代労働課長であり、別子鉱山労務の基礎をつくった方だ。直接お会ひしたことはないが、そのすぐれた業績は夙くから承知してゐた。私のことは津田（秀栄。住友合資人事部第二課長）を通じて知ってをられるはずだ。

と、紹介状もいただいた。その際、またその後の雑談のなかで次のやうな述懐を聴いた。

鷲尾さんは住友へ入社してほどなく住友の職員であることを秘して生野鉱山の飯場にモグリ込み坑内稼働の体験をしてをられるが、生野鉱山がこのことを知ったのは相当時間経てからであった。

平沢さんは、労務を深め、その責務を完うするには坑内稼働を体験する必要があることを痛切に感じ、或る期間他社の鉱山・炭坑で坑内稼働を経験したいから許してもらひたいと上申したが、許されなかった。労務係の者でもと願ったがこれも許されず、つひにこの願いは実現しなかった。その後 —— 恐らく大正十四年の生野鉱山争議のときであらう —— 十数年も前にそのことを躬行している鷲尾さんのことを知り、先覚として畏敬の念を抱いたという。

代表的企業各社の労務担当者について最初の著書といへる森田良雄さんの「日本経営者団体史」や稿「労務屋覚え書」には鷲尾さんの名は見当らない。鷲尾さんは明治四十年に住友に入社し別子鉱業所に赴任して以来昭和八年の暮に住友を辞任せられるまでの間、前記の転地療養と最後の海外事情視察のほかは殆ど別子に終始せられたので、社外との交流が多かった津田秀栄さんなど住友合資本社人事部第二課（労働課）の人達、伸銅所の三村起一さんなどに比して、その特段にすぐれた業績とともにその名がひろく世に知られてゐない憾みがある。

鷲尾さんは、五高に入学してから思ひ立って禅寺に住込み、雲水修業をしながら通学した。京大に進学してからも大徳寺の塔頭に住込んで同様の修業生活をした方である。住友総理事の鈴木馬左也さんが菅広州老師に参禅してをられた縁から住友に入社した。前記のやうに、生野鉱山飯場にモグリ込んで坑内稼働をし、帰山後も志願して坑内夫から修業していった。法学士ながらも採鉱課の坑道係主任となり、採鉱法や坑内運搬の改善、能率向上の実績を挙げ、他方私費を投じて自彊舎を設け、青年鉱夫を収容して起居を共にし、躬行教導するとともに

に部落の気風刷新に尽してをられる。大正十四年の別子鉱山争議の渦中においても採鉱課長を兼務したのは、右のやうな実績に因ってゐる。新居浜市民から市の恩人とも畏敬せられながら、住友を辞任するの因となった新居浜の都市づくりの基礎を昭和初期に推進せられてもゐる。それが自彊舎塾生や部落改善会員による作務（サムと訓む。今流にいえば勤労奉仕的な修業方法であり禅における日常行道である）が原動力となってゐる。これらは他に類例を見ない鷲尾さんの事績であるといってよい。

六、鷲尾さんの苦悩期

失意から立直ってゐない鷲尾さんのところへ久保さんが訪れた。此度已むを得ない事情から住友を辞任したことをわざわざ告げに立寄られたのである。大正七年秋の一日である。鷲尾さんは右の採鉱、運搬面で実績を挙げてゆく過程において一部の上司からあらぬ白眼視を受けるようになり、つひには閑職に放置された。その後誰も引受け手のない四阪島製錬所運搬系統の人員整理を引受けてこの大役も無事完了したが、心身ともに耗弱してしまった。六年初めに別府に転地療養したが経過がはかばかしくないので、七年春に津屋崎療養院に移ってほどなくのことである。

久保無二雄さんは、ドイツ留学中、欧米諸国視察に来た住友家長、鈴木馬左也等の一行の案内役となったのが縁で、家長、鈴木さんの勧めにより住友に入社した。鷲尾さんの入社当時は別子鉱業所副所長であり、間もなく所長となり、七年五月には本社理事に転じた。鈴木総理事の後継者と目されてゐた方であるが、或る事情から鈴木総理事は〝泣いて馬稷を斬る〟の余儀なきに至った。久保さんも辞任の途を執られた。住友合資からは退いたが、住友家長に嘱望せられてその後も住友家の子息の教導役をした。

久保さんの辞任は、療養中の鷲尾さんにとっては衝撃であった。縁下の愚流が極言すれば、久保さんの辞任は住友の脈流を変える岐点となった。鷲尾さんにとっても、新居浜の都市づくりの問題に直接してのこととはいへ、中途にして住友を辞せざるを得なくなる遠因はここに見出され、鷲尾さんの労務人生において重要な一機であるといってよいと思ふのである。

六、機縁の妙

鷲尾さんは久保さんの突然の辞職といふ衝撃を受け、米騒動の渦中において平沢さんは労務草創の基礎を固め、長沢さんは労務開眼して労務人生に針路をとった。

鷲尾さんは療養院に閉ぢこもってゐたことにもよるが、他の二人と出会ふことなく持場へ帰っていったのにひきかへ、長沢、平沢御両人はいづれは三井、三菱の両雄として会ふことになるにしても、上京の車中に同乗するといふ偶縁に運ばれてゐる。

かうしたところに、三傑それぞれの労務人生における大正七年といふ年の重さと、出会ひの機縁の玄妙を深く感ずるのである。資料の背面に陰に陽に有無脈膊つ機縁或は運といった深妙なものの息吹きを感ずるのである。

（昭五二・五・四）